



かなであん

249-0002 逗子市山の根1-7-24

Tel : 046-871-1863 Fax : 046-872-3485

[http:// kanadean.net](http://kanadean.net)

mail: ryukeiji@kanadean.net

われらは本願によらずば 救われざる時代に 生まれたのである

金子大栄 (1881~1976)

親鸞聖人のみ教えをお取り次ぎする僧侶として、如何に現実を生き抜く教えを説いておられたかをお話しさせていただくようにしています。しかし、「往生浄土の教えは、死後の問題であって、現実逃避の教えではないか」どまりの理解しかされないことが多いのは残念です。

確かに平安時代の中頃には、末法時代が強く意識され、人々がこの混乱の世を離れて、来世の平安を望み、極楽往生を願ったことが多くの書物に残っており、現実が苦悩に満ち、悲しいことが多くても、死後は平安であってほしいという、現実逃避の世界として受けとめられていたことが知らされます。

* * *

親鸞聖人が師と仰がれた法然上人は、阿弥陀仏の本願を信じただけ念仏して浄土に往生することを説かれ、親鸞聖人は、信心(念仏)の人は、もうすでに仏に成る身に定まっていると、煩惱を断つことのできない身のままで、今、菩薩と同じ位にしていると説かれたのです。

現実のさまざまな苦しみに目を向け、それを乗り越えていくことができるためには、生あるものが必ず迎える「死」という最も難しい問題をどう迎え入れ、乗り越えていくかということの解決なくしてはありえません。法然上人も親鸞聖人もこの点を見きわめていかれた方でした。

今を大切に、私自身の救いをあきらかにしていくということには、時代の問題を受けとめ、周囲の人々の苦しみや悲しみを共にする心がなければなりません。時代の濁りの中で、周囲の人々はさまざまな苦悩の中にあって、私だけは問題の解決がなされたというのでは、本当の救いがなされたことにはならないでしょう。この想いこそ、「誰もが隔てなく救われて仏に成らなかつたら、私も仏には成らない」と誓われた阿弥陀仏の救いなのです。「すべてを救う」という阿弥陀仏の救い、念仏のみ教えは、生かされている今の救いを説くがゆえに、時代の課題をつねに我がことと、共に生きる人々の苦悩を我が苦しみとして、生きる道を問うものなのです。

* * *

大地震、大津波、異常気象など、人がどんなに工夫しても、また努力をしても、どうにも

ならないことがあります。そんな時、人はただ生活の糧を得るためにだけ生きなければならないでしょう。しかし、そんな状況の中にあっても、人間を人として生かすものは必要なのです。それが、いかなる課題の中にあっても、揺るがぬ本願の大いなる慈悲の中にあることを受け入れていく安心ではないでしょうか。安全と言われ、その恩恵を当たり前のように受けてきた私たちが原発事故で気づかされたように、お念仏のみ教えに立ち返るとき、人間の営む生活の虚偽性が知らされます。

* * *

冒頭の言葉を遺された金子大栄師は、その生涯をかけて「浄土とは」という大きな問題を問い続け、親鸞聖人のみ教えを現代にあきらかにされた世界的な教学者です。

師の教学は、ともすると、今生きている時代の課題に目をそらしがちな私たちに、時代の課題は私と深く関っており、国や社会のせいばかりではない、私の「自己中心の生き方」が因となっていることに気づかされます。それは、時代を厳しく見て媚びず、念仏者としてどう生きるかを導いてくれるものです。

厳しく不安な時代です。どうぞお聴聞下さい。 合掌

奏庵法座
春の彼岸会

日時
3月26日（水）
午前11時より

「真宗宗歌」
阿弥陀経
法話
ご文章拝読
「恩徳讃」
～*～
おとき

ついこの間大雪を被って咲いていた梅の花が散って、桜へと移っていく景色はおぼろに霞んでいます。中国からの大気汚染のせいなどと野暮なこと言わないで味わいたいです。そしてこの時期の気候は、衛星を駆使して発達した予報より、私たちが自分の肌で感じてきた「三寒四温」に軍配が上がります。

日によっては、また寒い日になるかもしれませんが、春のお彼岸です。どうぞお参り下さい。



仏教へのいざない 【彼岸】

厳しい残暑も秋の彼岸になれば衰えて過ごしやすくなり、余寒も春の彼岸には薄らいでくる。彼岸会（ひがんえ）は、日本のみに行われ、人々の生活に溶け込んだ仏教行事のひとつである。日常の生活を反省して正しい精神生活を送るために、仏の教えを聞き、仏道精進の機会として生まれたものであろう。それは春分と秋分には、日が真東から出て真西に没するのでその日没を観じて仏の世界、すなわち彼岸の浄土を念想し、浄土に生まれることを願ったのに由来する。「観無量寿経」の中に、「汝および衆生、まさに心を専らにし、念を一処にかけて、西方を想うべし」と説かれている。それは、人生の帰すべき処を象徴的に教え示すものであり、日没はまた、浄土の方向のみでなく、人間の罪障の深重を知らしめ、かえって阿弥陀仏とその浄土の光明に、この身が照らされていることを知らされる。親鸞は、「仏はすなわちこれ不可思議光如来なり、土はまた無量光明土なり。しかれば大悲の誓願に酬報するがゆえに、真の報仏土というなり」と述べている。真実の浄土とは、仏の大悲の誓願によってよって完成された無量光土である。本願の信に開かれる浄土は、限りない光の世界なのである。「塵勞を出でて彼の岸に登らん」と勧められるように、無明の迷いを越えて、かぎりない仏の光明の世界に、ともに目覚めて生きるものとなりたいたいものである。

（大谷大学編）

そのほとんどを買って読むことはないが、暇に飽かして新聞に掲載されている書籍や雑誌の広告見出しを眺める。相変わらずダイエット、健康本は不滅だが、やはり日中、反日、嫌韓は目立つ。「今は戦前の日本に似ている」などの政権の右傾化を憂うものも多い。それに神社や神道を取りあげるものが多いと感じるのは気のせいだろうか。■沈滞化を払拭しようとするかのような思惑がはたらくのは解らないではないが、終戦後一世紀近くになお、戦争を仕掛けた国、そして敗戦国であるという負い目を突きつけられている中、また「のっぴきならぬ」ところに追いこまれてゆくような怖さを感じる。■国と国が争うということによって生まれた「歴史認識」だから、双方に「違い」があって当然で、そもそも「認識」という曖昧な表現なのだから白黒つけられるようなものではないはずだ。そう言ったらまた、彼の国から「正しい歴史認識のない国に未来はない」と言われるのだろうが、日本が敗戦国という立場だけは決して覆すことの出来ないことなのだ。■お互いに「正義」というものがあり、振りかざされるその正義は、いつも手前勝手であるのに、その前では人はすくみ、支配されるから恐ろしい。それだけに繰り返すことがあってはならないと心から願う。■国と国との関係も、元は人と人との感情だ。「許せない」という感情を抱くことも多々ある。たとえ許したと思っていても、何かの拍子にふり返すこともある。そして、いつまでも恨みがましい自分を持つて余し、自分自身が嫌になる原因となるものでもあるのだ。人も国も、口惜しさや恨みを抱いて生きることは決して楽しいことではないはずだ。■恨みを忘れられない苦悩も、蔑まれ続ける苦悩も、「許す」他に晴れることはないのではと思う。だが、「許す」ということは難しい。「許してやる」と、一方が自分には非がないとする上から目線である間は完結せず、「許し合っ」はじめて「許す」は完結されるものだ。平和のためには、「許されて生きている」という地球共通の想いを育てていってほしいと願うのは甘いのだろうか。 Norimaru